

めんたるねっと

VOL.20-1

No. 77

研修報告	ヤングケアラー ～精神疾患のある親を支える子どもの実情～	2
トピックス	畑から「農業」と「食」を憂う～次世代の子どもたちのために～	4
被災地より	「薬物乱用防止教室」で伝えていること～“生きづらさ”に焦点	5
書籍紹介	あふれでたのはやさしさだった ～奈良少年刑務所 絵本と詩の教室	6
活動報告	ジョブコーチ / 子どもとみんなの食堂 ～皆の支援で1周年	7
	Irodori ～見学者が増加 / 駄菓子屋カフェ ～居場所として定着	8
	キャリアデザインスクール ～農業プログラムで生き生きと	9
	事務局より / 予定・報告	10



「ヤングケアラーについて」

～精神疾患のある親を支える子どもの実情～

社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会 ケアラー支援専門員 中島契恵子

今年度のYMSN総会后研修会では、当法人の理事でもある中島契恵子さんに表題をテーマとした講演をしてもらった。オンラインの研修には14人が集まった。具体的な事例を挙げながらの中島さんの講義を受け、支援者としての関わりについて今一度見直すことが出来た研修会になった。以下、その時の講演内容を中島氏にまとめてもらった。

本日は、この様な機会をいただきありがとうございます。

ヤングケアラーは、最近、特に注目を浴びるようになりましたが、日本で着目されるようになったのは約10年前からと言われています。2015年に、新潟県南魚沼市で実施されたケアラーに関する調査がきっかけとなり、その後、国をはじめ多くの自治体で実態調査が行われています。

神奈川県では、国の掲げるヤングケアラーコーディネーターと同様の役割をもつ「ケアラー支援専門員」を配置することになり、2022年5月より、(福)神奈川県社会福祉協議会が委託を受けています。

さて、ケアラーという言葉ですが、「介護する人」を意味します。これまで家族によるケアは、40～50歳の世代が親の介護をするイメージですが、10代や20代で家族のケアをしている若者がいる現状もあります。しかも、通学や仕事をしながら家族をケアするヤングケアラーや若者ケアラーは、年々増加傾向にあります。

つまり、ケアラーは、全世代にわたり存在し、かつ多様であり、介護だけに留まらないことから、広く「ケアラー」と言う言葉を用いて表現しています。

お手伝いと何が違うのでしょうか。大人が担うような重いケア責任を長時間、長期的に行うこと、「今日はできない。したくない」と断ることができない状況はお手伝いではありません。

では、ヤングケアラーが問題になっている背景に何が
あるのでしょうか。

少子高齢化社会が進み、共働き世帯やひとり親家庭、

ケアを必要とする家族の増加の中で、大人が担うようなケアを子どもがせざるを得ないのです。家族のケアをすることは、決して悪いことはありません。子どもが家族の役に立ちたいと思うのは当然の気持ちです。しかし、ケア負担が限界を超え、学業や就職、子ども・若者らしい生活や将来まで犠牲にしてしまうことがあります。

特に、18歳未満の子どもの場合、「児童の権利に関する条約(通称:子どもの権利条約)」にあるように、子どもは「適切な教育を受け、健やかな成長・発達や自立が図られること」等を保障される権利があります。ケア負担により、子どもの最善の利益などが擁護されていないことに大きな問題があります。

本日は、精神障がいの方に関わる専門職の皆さんです。ここからは精神疾患の親を持つ子どもの会「こどもびあ」の調査を参考にさせて頂きながらお話を進めます。

精神疾患を抱えた家族にどのようなケアをしているのか？

私は長年、精神障がいの方々と関わってきましたが、そのお子さんに思いを寄せることは、残念ながらありませんでした。子どもが家族のケアを担う存在であると考えもしませんでした。この仕事に携わり、ケアラーの声を聴く中でこの様なケアを担っていることを知りました。

不安定になったとき人と話すこと・話を聞いてもらうことで安定することがあります。

子どもは家族なので親子で会話をすることは当然

り前だと思えます。しかし、親の不安が強いと話が長時間にわたり、子どもが受け止められないような重い内容になることがあります。子どもは、このような時、親を不安にさせないために、刺激をしないよう言葉を選び、慎重に対応することが求められます。

さらに病状が悪化すると、「死にたい」「消えたい」と口にすることもあります。手を握り、背中をさすって「大丈夫だよ。私がいるよ」と繰り返し声をかけながらそばに付き添います。子どもは、それが病状からくるものだとはわかりません。自分がこんなに母親を大切にしているのに、と悲しくなり無力感を感じますが、眠気をこらえて一晩中付き合うのです。このような感情面のケアをしている子どもがいます。

また、手順の多い家事が難しくなる場合があります。食事が作れない、洗濯や掃除等ができないこともあります。例えば、うつ病の母と暮らす子どもは、朝起きられない母を気遣って、用意した菓子パンを食べ、起こさないように家を出ます。何日も入浴もしていないことや洗濯されていない衣類を着ていることで「臭い、汚い」と学校でいじめられます。さらに、母親の病状が悪いときには一人での外出が不安になります。そのような時、子どもは学校を休んで受診に同行することや代わりに薬を取りに行くこともあります。

学校には提出しなければならない書類があります。病状が不安定な時は、書類を読んでも、その内容を理解し、何を記載するのか分からない場合があります。結局、締め切りまでに提出することができず、子どもが先生に叱られます。先生には、その背景には何があるのかを理解してもらえたらと思います。

「こどもびあ」の調査結果から、問題を抱えながらも「誰にも相談しなかった」と回答した子どもが多い現状があります。その理由は、「家族から口止めされていた」「隠すべきこと」との回答が多く、精神疾患に対する偏見はまだ根強く、「他人には知られてはいけないこと」と捉えざるを得ない状況にあることが見て取れます。また、他者に知られることで親が責められ、差別されることのないように「相談しない」と答えている子どももいます。

精神疾患の親をケアしているヤングケアラーは、どのような困りごとを抱えているのでしょうか？

学校にいる間、「リストカットをしていないか？

苦しんでいないか」など、常に親の状況が気になり授業に集中できないことがあります。また、ケアがいつまで続くか、終わりの予測がつきません。自分の将来をどのように考えればよいか悩み不安になります。その結果、進学・就職・結婚に悩み、結論が出ることなく諦めてしまうこともあります。

では、ヤングケアラーが見過ごされてしまうのはなぜでしょうか？

「家族のことは家族が」という家族規範やそれが当然という思い込みが、家族にもケアラー自身にもあります。また、社会も家族がケアすることに期待しています。また、子どもが家族を大切にする気持ちは当然で家族の役に立ちたいと思い、当たり前前にケアを担います。

それから、他の家庭と違う状況にあることで、仲間外れやいじめに合うのではと不安になり、人には言わないという状況にも陥りがちです。また、ケアをすることが日常的なので自覚がなく、他の家族の現実を知らないことで自分がヤングケアラーであるという自覚のない状況にあります。

これらのことから家族内の問題として考えられ、外からは見えにくい状況になります。

ヤングケアラーの存在に気づくには、学校の先生や地域の方々が子どもを「ヤングケアラーかもしれない」と言う視点で見てくださること、もしくは、アンテナを張っておくことが必要です。そのような子どもに関わる大人側の意識がないと見えないのです。

ケアラー・ヤングケアラーの問題は、何より気づくことの難しさにあります。本人からSOSを発信しにくい状況にあり、一方で、気付いた大人や支援者側は、家庭の問題やプライバシーにどこまで関わってよいか？と言った戸惑いも感じられるかと思います。

神奈川県では、ご家族・ケアラーご本人からのご相談を受けています。(QRコード)

私たち(福)神奈川県社会福祉協議会のケアラー支援専門員は、気が付いた大人や学校のSSW、子どもに関わる専門職、家族や子どもに関わる可能性のある支援者の方からのご相談を受ける支援者への支援を担っています。お気づきのことがあれば、是非、ご相談ください。

畑から「農業」と「食」を憂う

～次世代の子どもたちのために～

はじめに

YMSNが今年度から開始したよこはま型若者自立塾のプログラムでは、畑作業が週1～3日取り入れられている（横浜市からの要望でもある）。私もまた昨年から横浜市内で週3回畑仕事に関わっている。まだ関わって短期間ではあるが、この間に感じ始めた漠然とした不安はどんな事に起因またつながっているのかさぐってみた。

農業全体の状況

1年の間に、畑の周りの景色がどんどん変わっていく。少し前まで畑仕事をしていた方を見かけなくなったと思ったら畑にブルドーザーが入り、あっという間に資材置き場になった。そしてまた別の畑がなくなり家が建った。少し前まできちんと耕されていた畑は、耕していた人と共に減っていく。この風景は日本の農業全体の風景の一端ではないか。日本の食の自給率は38%と低い。食料輸入がストップしたらどうなるか？鈴木宣弘氏は『日本の農業の現状を見ると際限なき自由化を進めていることで国産の農産物が買い叩かれている。さらに高齢化による担い手不足、耕作放棄地の増加、集落消滅の危機が拡大し… 農業・農村の疲弊と消滅の危機は深刻度を増している』（「農業消滅」より）と述べている。

要である種子と安全な「食」への危機

農業の現状でさらに具体的にどんなことが起きているか？ 実は野菜等の生産以前に種子そのものが危険にさらされている。2017年、「主要農作物種子法」（以下種子法と略す）がわずかな時間で採決され廃止された。誕生した1952年以来この法律は、日本人の主食である「コメ・麦・大豆」という3主要農産物が『各都道府県の風土に適した種を選別して農家に安定し、安全かつ安価に提供してきた大切な法律だった』（「売り渡される食の安全」著山田正彦）。それまで種子はほぼ100%国産だったが今は大半が海外グローバル企業（もともと農薬のメーカー）によって生産されている。そして日本で進行中の種子企業に対し以下の便宜供与がされることになった。①公共の種はやめさせ

る ②種の譲渡（これまで開発した種は企業が得る）③種の無断自家採種の禁止（企業の種を買わないと生産できないように） ④遺伝子組み換えでない（Non-GM）表示の実質禁止（2023年4月1日から）⑤GMとセットの除草剤（グリホサホートの輸入穀物残留基準値の大幅な緩和…）（「農業消滅」より）。鈴木宣弘氏は「日本はグローバル企業の餌食になる」と危惧している。

カルフォルニアでは、GM（遺伝子組み換え）種子とセットのグリホサートで発がんとしてとしてグローバル種子企業に多額の賠償判決が多数出ている。

遺伝子組み換えの食品はなぜ問題か、カリフォルニアのある主婦が3人の子供たちが全員アレルギーをもってためそれまで食べていたものを徹底的に調べた。その結果アメリカで流通する加工食品の85%に遺伝子組み換え食品が含まれていたという。そこで日々の食卓から遺伝子組み換え食品をすべて除くこととした。すると3人のアレルギー症状は短期間で改善されていった（「売り渡される食の安全」山田正彦著）。想像もしていなかった恐ろしい事態が進んでいる。

終わりに

日本の土壌は豊かで肥沃と言われている。世界でも貴重なこの肥沃な土を農薬などで壊さず、グローバル企業の餌食とならず、安心して食べられるものを作り続けられるように願う。次世代のためにもどこまで守っていけるか、それは消費者である私たちの意識にかかっている。次世代の子どもたちのために、私もできるだけの努力をしようと考えている。

（YMSN 森川充子）

参考文献

- ・「日本が売られる」堤未果 著(幻冬舎新書) 2018年
- ・ルポ「食が壊れる」堤未果 著(文春新書) 2022年
- ・「売り渡される食の安全」山田正彦 著(角川新書) 2019年
- ・「農業消滅」鈴木宣弘 著(平凡社新書) 2021年

「薬物乱用防止教室」で伝えていること

～背景にある“生きづらさ”に焦点を～

片柳 光昭（せんだいG&Aクリニック）

筆者は数年前から、ある高校からの依頼で「薬物乱用防止教室」の講話を行っている。

初めてこの依頼を受けた時、特段、薬物に関する専門家でもなく、当時は薬物治療に携わってもいなかった筆者に何を期待しているのだろうと戸惑った記憶が残っている。そのことを率直に質問したところ、高校の先生からは「生徒たちの心の問題が解決されないことが、様々な形で生活上の問題となって表れているのではないかと思う。そこで、心やメンタルヘルスの視点から伝えてもらえないだろうか」とのことだった。

ちなみに、その高校には薬物の問題を抱える生徒はいなかったのだが、リストカットなどの自傷行為、不登校、ゲーム依存、家庭内の不和などの問題を抱えている生徒は少なからずいるとのことだった。「薬物乱用防止教室」と聞くと、大変縁遠いように捉えていたのだが、様々な問題を抱える中学生や高校生と日々面談しており、そのことを振り返ると高校の先生がお話し下さったことは筆者の経験とびたりと重なるものだった。そこで、日頃の面談の中で感じていることを多くの生徒に伝えられる機会と捉え、お引き受けすることとした。それから毎年、お引き受けしている。

ところで、「薬物乱用防止教室」と聞くと、どのような内容を想像されるだろうか。一般的には、覚せい剤や大麻などの違法薬物はどんな成分で成り立っていて、身体や心にどんな悪影響が及んで、その人やその周囲の人の人生はどのような苦しく、辛いものになるのかといった、いわゆる「ダメ、ぜったい」にたどり着くような内容を思い浮かべると思われる。筆者が講話の中で伝えていることは、これらと凡そ異なっている。講話では、薬物を乱用することの恐ろしさを伝えるのではなく、それまでの薬物のない生活が、日常の些細な出来事によって、薬物を使いたくなる心の動きを紐解くことから始まる。そして薬物だけでなく、

リストカットやアームカット、ゲーム、アルコールなども共通して、自分が抱えている生きづらさをほんの少しだけ紛らせて、ほんの少しだけホッとできるための手段であり、そうせざるを得ない背景にある生きづらさに焦点を当てる。それらの手段の善悪は伝えない。

またよくある誤解の、「かまってちゃん」だから、心が弱いから、アピールしたいから、だからそういったことに手を出すという文脈は明確に否定する。その一方で、生きづらさを抱えながら生きていくためにしていたそれらにより、少しずつ自分が傷ついていくこと、それがエスカレートすると、知らず知らずに究極的には死に近づいていくことになり、いつの間にか生きるための手段ではなくなってしまうことを伝える。

講話の最後には、筆者から3つの願いをして終える。3つの願いとは、「もし、過去に自分を傷つけていたのなら、そんな自分を責めることなく、ここまで生きてきたことをねぎらってほしい」こと、「もし今、自分を傷つけているのなら、信頼できる誰かにそのことと伝えて、あなただけで抱え込まないでほしい」こと、「もし、周りの誰かが自分を傷つけているのなら、誤解なく理解して、一言声をかけてあげてほしい」ことである。

これが薬物乱用防止の内容か？と疑問を持たれた方もいるかもしれない。後付けになってしまうが、筆者がクリニックでアルコールや薬物、ギャンブルなどの依存症の治療に携わるようになって感じていることは、その患者の多くは、その人生のどこかで自分ではどうにもならない生きづらさに圧倒され、飲み込まれた経過があり、そしてその生きづらさには例外なく人が関係している点である。いじめられたこと、裏切られたこと、だまされたこと、愛情を注がれなかったことなど、限りがない。さらに言えば、東日本大震災後の被災地では、今では想像もできない、様々なこと

が起きたと考えられる。そのような背景がある人達にとって、乱用や依存する何かは生きる手段でもあり、そして、その乱用や依存を自ら手放すきっかけの一つは、もう一度、少しずつでも人を信じられるようになることにあると思う。高校生という人生の早い段階で、これらのメカニズムを知り、自分自身や周りの人たち

を正確に理解し、生きていることを労う大切さを知ることが極めて重要であると考えている。

決して正解があるわけではないと考える。だからこそ、筆者自身の信念に沿って、大切だと感じるものをクリニックの場面で、またこういった教室という機会を通じて届けていきたい。

書籍紹介

あふれでたのはやさしさだった 奈良少年刑務所 絵本と詩の教室

寮 美千子著

西日本出版社

これは奈良少年刑務所における『社会性涵養（かんよう）プログラム』の実施記録である。

著者は作家で、リハビリテーション等の専門家ではない。ひよんな事から、この少年刑務所内の社会矯正プログラムを引き受ける事となり、その実施に伴い、受刑者でもある少年たちの心の変化と成長を目の当たりにしてきた記録でもある。

と、書くと些（いささ）か畏（かしこ）まるが、文体は平易で読み易い。

対象となる少年たちは、受刑者の中でも、特に外に向けて暴力性を発揮する様なタイプではなく、むしろおとなしくて、目立たない、やられっぱなしの子たちである。

内面に大きな怒りを抱えた彼らの内面は分かりにくく、働きかけの糸口も見つけづらい。そんな彼らに著者がどう働きかけ、どう接し、どんなプログラムを実践するのかは、実に興味深く、面白い。

何より、この書籍の中で筆者が語る少年受刑者達が「加害者になる前に被害者だった」「困難な背景もないままに、もって生まれた性質だけで犯罪に至った子など一人もいなかった」と訴える内容は我々の様な職種の者にこそ深く考えられる内容なのではないだろうか。

（YMSN会員 相原俊介）



ジョブコーチ

ジョブコーチ支援の終わる方が増えています。ジョブコーチは長くても1年半程度と支援期間が決まっているので、皆さんが職場に慣れてきた頃に支援期間満了となります。仕事内容は、作業をしながら得意なこと、苦手なことを確認し、企業の方、ご本人と相談しながら作業内容を決めていきます。1年を通して支援させて頂いているので、

その方の苦手な季節やどのように体調が崩れてしまうのかなど理解することができます。

場合によっては通院同行もしながら、苦手な季節を乗り切るための対処の仕方などを本人と相談しています。また、その時期だけ仕事の負担を軽減して頂けるように企業の方に相談・調整をお願いし、その時期を乗り越えられるようにご協力頂いています。ほとんどの方は支援期間内に職場定着されています。安心してフェイドアウトする方もいますが、一方で定着されながらも体調が安定しない方も多いため、本人が自身で対処できるようになるまで、もう少し支援が必要な方も正直多いです。これから他の支援機関に引き継ぎをお願いしていきますが、もう少し期間があると安心してフェイドアウト出来るのかなと支援期間が終わる度に感じています。

(YMSN 吉成広美)

子どもとみんなの食堂

昨年6月から始めた「子ども食堂」も、多くの方のご協力のもと無事に1年が経ちました。本当にありがとうございます。

手探りの中で始まり、毎月「あれが足りない」「これも必要」とバタバタと行ってきましたが、ボランティアのお母さんたち、学生さん、当法人を応援して下さいの皆様のおかげで、今ではスムーズに子どもたちと一緒にカレー作りが出来るようになりました(笑)

包丁を持ったことのない子どもたちもいましたが、参加する度に野菜を切るのが上手になってきています! カレーが出来上がる前までの空いた時間には、ボランティアの方々のお楽しみ企画が行われ、



ボランティアのバンド演奏

バンド演奏やパルーンアート、プチ縁日やハロウィン、怖いお話の会などを担って頂き、子どもたちだけでなくスタッフも毎回楽しませて頂いています。

参加する子どもも世代交代? をしながらも、毎回参加している子や初めて参加する子もいて、毎回多くの子どもが参加してくれています。ボランティアの方々に支えられての「子ども食堂」ですが、地域の皆さまに協力を頂きながら、これからもスタッフ一同楽しんで続けて行けたらと思っています。

(YMSN 吉成広美)

Irodori

スタッフの宣伝効果もあり、見学の方が増え、その子たちが通ってくれるようになり、ちょっとずつ賑やかになりつつあります。平日の活動では月曜日は勉強のお手伝いをしたり、火・木曜日は焼きそばなどのおやつを作ったり、テレビゲームのwiiでマリオカートやカードゲームなどを楽しんだり、アニメのお話をコラボして創作を考えるのが好きな子もいて、楽しく過ごしました。

秋のバザーに興味があり、自分の作ったレジン作品を販売したいという子もいて、作品を作るのを楽しんでいる子もいます。

昼食会は毎回、賑やかで、平日来られない子たちが参加してくれ、毎回、ちらし寿司や牛丼、オムライスなどボリューム満点の美味しいご飯を楽しく作っています。食事後の片付け決めのゲームは大人数なので、カルタやUNOなどがいつも盛り上がります。

これからもおやつ作りやゲームなどを通して、Irodoriの子たちと楽しく交流していきたいです。(YMSN 原悦子)



駄菓子屋カフェ



カフェは日に日に暑さが増して、アイスコーヒーがよく売れる時期になりました。

トライの卒業生の方やIrodoriの見学にご家族が来店され、お庭のお花や畑を見ながら、季節の移り変わりを感じつつ、おしゃべりを楽しみました。Irodoriの見学のお子さんが来たときなどは、ボランティアのスタッフさんがカードゲームなどをしてくれたりして、楽しみました。来店をお待ちしています。

駄菓子屋は、来店してくれる子たちの世代が代わり、小学4年、5年生の子たちが増えています。お友だちがお友だちを呼び、居場所として駄菓子屋の存在が広く知られるようになってきている気がします。子どもたちは駄菓子を食べながら、ハンモックでゆったりおしゃべりしたり、トランプやジェンガをしたり、水曜日はwiiの日なのでゲームを楽しんでいる子もいます。中華街のお店の方からいただいた中華風蒸しパンも子どもたちは喜んで食べてくれて、うれしいです。

最近はキャリアデザインスクールのお兄さん、お姉さんたちが育ててくれた庭の畑のキュウリやナス、トマトなどのお野菜を収穫させてもらっています。子どもたちは自分で収穫してお持ち帰りするのがとても楽しいようで、いつも笑顔で帰って行きます。

収穫したキュウリをその場で食べる子もいて、「取れたてキュウリ、美味しい!」と言って、笑顔で完食してくれます。

駄菓子屋がみんな楽しそうに、ゆっくりできる場所として定着しているのが、とてもうれしいです。これからも子どもたちとおしゃべりやゲームをしながら、楽しく過ごしていけたらいいなあと思います。

(YMSN 原悦子)

キャリアデザインスクール

4月から始まった横浜市の若者自立塾事業「キャリアデザインスクール」の農業プログラムを報告します。

新しく広い農地を港南区内に借りて、最初は塊になっている土をスコップや鍬（くわ）を使って耕しました。

この土作りがとても大変でしたが、ボランティアさんにも手伝っていただき、皆で頑張りました。

育てている野菜は8種類、きゅうり、トマト、ズッキーニ、トウモロコシ、メロン、枝豆、オクラ、里芋です。

作物によって、育つペースが違ったり、鳥獣に食べられたりしますが、6月中旬からたくさん収穫できています。



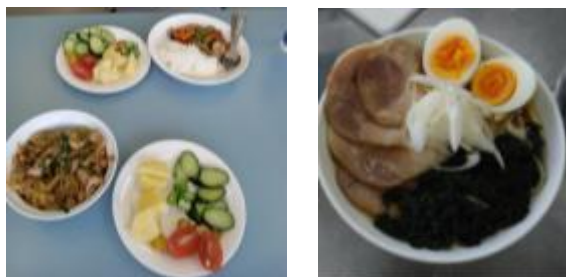
畑での作業

農業をしていると、外で体を動かすと楽しそうな笑顔が出る方や、声が小さかった方が大きな声でボランティアさんに話しかけるなど、生き生きとした一面を見せてくれます。

モチベーションは人それぞれ。体力を維持したい、植物や自然が好き、コミュニケーション力をアップしたいーなど、いろいろな方に体験していただきたいプログラムです。

キャリアデザインスクールでは他にもプログラミング、コミュニケーション講座、森林セラピー、ボランティアなどさまざまな体験のプログラムがあります。複数のプログラムを組み合わせる週何日か利用したり、それぞれのペースで利用していただいています。

(YMSN 山口 奈保)



畑で採れた野菜と丼物とラーメン

採れたトマトやきゅうりをその場で丸かじりする楽しみも味わい、調理プログラムでサラダを作って食べました。

キャリアデザインスクール参加者募集中

- 横浜市内在住、15歳～39歳の若者
- 月額10000円スタンダードコース
- 1回700円フレキシブルコース

興味がある方は、お問い合わせください。

電話 045-841-2179

メール ymsn@forest-1.com

生活リズムをつけて、仲間と学ぶスタンダードコース

生活リズムをつけながら興味あるプログラムを体験するスタンダードコース

興味あるプログラム(全5回)を体験してみるフレキシブルコース

ご寄付のお願いと報告

- ・会費をいただいた方(2023. 4.01~7.14)
 - ・渡辺英俊、大倉よしの、原直呼、松本まさみ、佐藤幸江、渡辺和美、野末浩之、久間久恵、宮崎全代、吉野裕、山本香奈芽、加瀬昭彦、大平道子、中島契恵子、すぺーす海、鈴木玲子、佐倉洋、羽鳥乃路、金山正恵、木村幸代、桐原重孝、岳瀬真理子、山本圭子、武井昭代、神奈川ゆめ社会福祉財団、原悦子、山口奈保、渡部恵梨子、鈴木弘美、高橋恵、宮タズ、片柳光昭、(以上、敬称略)
 - ・寄付をいただいた方 (2023. 4.01~7.14)
 - ・蔡奈美、渡辺幸子、佐倉洋、金山正恵、武井昭代、福井里江、税)エクラコンサルティング (以上、敬称略)
- ・ありがとうございます
- ・寄付をお願いいたします。
 - ・認定NPO法人なので、寄付をいただくと(所得税40%+住民税10%)最大50%の減税になります。今後ともご協力よろしくお願いいたします。

当事者のためのグループ活動

- ・就労フォローアップミーティング
 - ・年1回、OB会の開催
- ・就労者SST
 - ・日程 毎月 第1土曜日 時間 pm. 1:00~2:30 場所 YMSN
- ・当事者グループ活動

駄菓子屋カフェIrodoriイベント

「本の会」「子どもとみんなの食堂」のご案内

- ・日程 毎月第2土曜日
- ・会場 駄菓子屋カフェIrodori デッキスペース
- ・「本の会」 11時00分~11時30分 赤ちゃんから5~7歳
- ・「子どもとみんなの食堂」 15時~18時 どなたでも(事前予約)

正会員：5,000円(個人) 賛助会員：12,000円(団体)
(正会員・賛助会員にはYMSN情報誌を無料配付)

振込先：郵便振替口座 00250-6-71607
横浜メンタルサービスネットワーク

会費を銀行・コンビニATMやネットから振り込む場合の入力方法をご案内します。

振り込み料は432円かかりますが、郵便局に行かなくても良いので楽は楽です。

(金融機関名) ゆうちょ銀行 (店名) O二九
(種別) 当座 (口座番号) 71607
(名義) ヨコハマメンタルサービスネットワーク

季刊 YMSN情報誌 Vol. 20 No. 1
YMSN 第77号 2023年7月20日発行

年間購読料1,000円(年4回発行) 1冊頒価300円

発行：NPO法人 横浜メンタルサービスネットワーク
理事長 鈴木弘美 編集代表 森川充子
〒234-0052 横浜市港南区笹下1-7-6
TEL 045-841-2179
FAX 045-841-2189
<http://forest-1.com/ymsn/>
e-mail: ymsn@forest-1.com